

キャンパスことばの定着と大学適応の関係：
語彙性判断の反応時間と個人特性の相関の検討

今野成真¹ 木山幸子²

¹ 東北大学文学部言語学研究室, ² 東北大学大学院文学研究科言語学研究室

seima.konno.r2@dc.tohoku.ac.jp, skiyama@tohoku.ac.jp

1 はじめに

近年日本社会では、大学・短期大学の増加、学部の新設と少子化に伴う受験者総数の減少の傾向が増している。2007年には大学の入学希望者総数が入学定員総数を下回る「大学全入時代」が到来した。それに伴う若年層の大学に対する意識の低下と「大学離れ問題」が深刻化してきている。文部科学省の発表によると、平成19年度の大学中退率は2.41% (63,421人)であったのに対し、平成24年度の大学中退率は2.65% (79,311人)と、増加傾向にある。そのような大学になじめない学生を早期に発見することはできないのだろうか。大学への適応度を反映する指標の1つとして、本研究ではキャンパスことばに注目する。

一般に、単語の語彙性判断（その単語がその言語の語彙にあるものかどうか）にかかる時間は様々な要因に左右されるが、中でも親密度が高い単語に対して反応速度が速くなることが知られている（天野・近藤、1999）。同時に、単語の語彙性判断の正答率や反応時間に及ぼす親密度の影響の度合いには個人差があることも明らかにされている（水野・松井、2015）。

キャンパスことばを対象として語彙性判断課題を行った小野・柳野・小川・大塚（2017）は、「各個人が所属する集団の中で語彙頻度や親密度が高い単語に対する反応時間によって、その各個人の集団を推定することが可能なのではないか」という仮説のもと、津田塾大学の学生か否かを選別する語彙判断課題「梅子チェッカー」を開発した。小野ら（2017）に基づき、薄井・駒形・

今野・藤井（2018）は、東北大学に属する学生が日常頻繁に使用したり耳にしたりする単語を選定し、それらを用いた語彙判断課題を実施することで東北大学（とんぺー）という集団に属するか否かを判断する「とんぺーチェッカー」を作成した。

本研究は、深刻化する大学離れの問題の一助となることを期待して、大学への定着度を測る語彙性判断課題の正答率や反応時間の指標を用いて、「キャンパスことば」という視点から大学という環境に適応できている学生のふるまいが在学期間を通じてどのように変化するかを同定し、そうした学生に特徴的な個人特性との関連を明らかにすることを目的とする。具体的には、東北大学に通う文科系学部の学生（以下「東北大生」）を対象に、「とんぺーチェッカー」による正答率や反応時間について、学年による変化、および友人関係尺度（岡田、1995）と大学生活不安尺度（藤井、1999）の得点との関連を検討した。

2 方法

2.1 参加者

2018年11月から12月にかけて、東北大学の文系学部（教育、経済、文、法）の学部生102名が本実験に参加した。そのうち、1年生が21名（男性10名、女性11名）、2年生が29名（男性11名、女性18名）、3年生が26名（男性11名、女性15名）、4年生が（男性12名、女性14名）であった。

2.2 材料

語彙性判断課題の刺激語は、薄井ら（2018）の

「とんぺーチェッカー」の刺激語を使用した。「とんぺーチェッカー」は、予備調査を経てターゲット刺激である東北大学特有のキャンパスことば（以下「トンペー語」）33語、とんぺー語と文字数、漢字仮名、語構成等に対応させた一般語33語と非単語66語の計132語から成る。

参加者の個人特性を測定するために、大学滞在時間（週に平均何時間大学に滞在するか）、友人関係尺度（岡田、1995）と大学生活不安尺度（藤井、1998）も利用した。青年期の友人関係を測定する友人関係尺度は、全17項目から成り、気遣い尺度（友人に気を遣いながら関わるかどうか）、ふれあい回避尺度（友人との深い関わりを好むかどうか）、群れ尺度（集団で表面的な関わりを好むかどうか）の3つの下位尺度に分類されている。大学生活不安尺度は、大学生において特徴的に認められる不安感の程度を測定するものである。全29項目から成り、日常生活不安尺度（大学生活全般への不安）、評価不安尺度（テストや成績に対する不安）、大学不適応尺度（大学のレベルや相性に対する不安）の3つの下位尺度に分類されている。

2.3 手続き

語彙性判断課題では、各単語がランダムに提示され、その単語が日本語の語彙として存在し、意味を知っているかどうかの判断を、ボタン押しによってできるだけ早く正確に回答するよう求めた。刺激提示と行動データの取得は、E-prime, ver. 2.0 (Psychology Software Tools, Pittsburgh, PA) を利用した。

2.4 分析

線形混合モデル (linear-mixed effect model: LME) によって、語彙性判断課題の正答率と反応時間を分析した。反応時間の指標については、4秒以上かかっているデータを外れ値として除外（11刺激）し、残ったデータの平均値と標準偏差を算出し、平均から2.5標準偏差の範囲を超えている値を2.5標準偏差の値に変換した（全体の1.9%）。各指標

について、独立変数（固定効果）として学年と性を含め、参加者と刺激語をランダム要因とした。また、友人関係尺度と大学生活不安尺度もそれぞれ固定効果要因として追加し、語彙性判断の行動指標に影響が認められるかどうか検討した。モデル推定には R version 3.5.0 上のパッケージ lme4 (Bates, Maechler, Bolker, & Walker, 2014) と lmerTest (Kuznetsova, Brockhoff & Christensen, 2014) を用いた。

3 結果

語彙性判断課題のとんぺー語と一般語の平均反応時間の差の学年による推移には、性差が見られる（図1）。女性は1年次（12月）において最も一般語に比べてとんぺー語への反応が速く、その後学年が上がるにつれ遅くなっていく。それに対して男性は、1年次から3年次までは学年が上がるにつれてとんぺー語への反応が速くなり、4年次では遅くなる。反応時間差が長くなっている。LMEの結果は、1年次と2年次の変化の性差 ($t = -2.946, p = 0.003$)、1年次と3年次の変化の性差 ($t = -4.607, p = 0.000$)、1年次と4年次の性差 ($t = -2.771, p = 0.006$) の有意な交互作用が見られた。

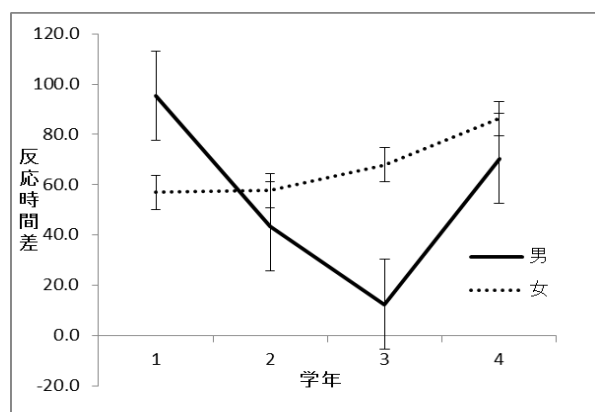


図1 語彙性判断反応時間における一般語とキャンパスことばの差の年次変化（とんぺー語 - 一般語; ミリ秒）

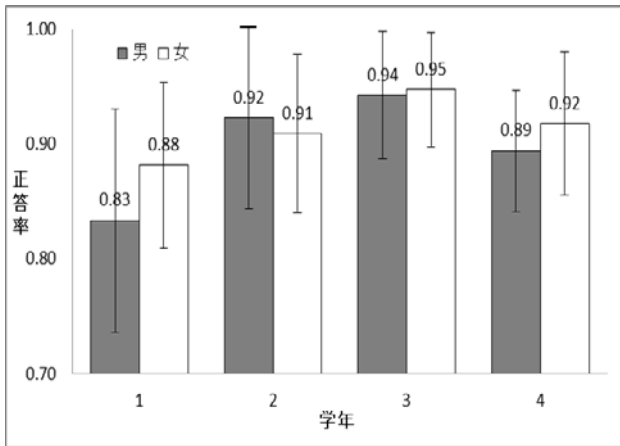


図2 キャンパスことば（とんぺー語）の語彙性判断の正答率の年次変化

正答率に関しては、一般語では学年、性にかかわらずきわめて高かった（1年: 0.96、2年: 0.97、3年: 0.97、4年: 0.98）。とんぺー語の正答率は、図2の通り、男女とも3年次にもっとも高くなり、4年次に低くなった。LMEの結果、1年次と2年次の間と性差 ($z = -2.378, p = 0.017$)、1年次と3年次の間と性差 ($z = -2.038, p = 0.042$)、1年次と4年次の間と性差 ($z = -3.135, p = 0.001$)の交互作用が有意であった。

個人特性については、大学滞在時間（1年: 37.1時間、2年: 37.3時間、3年: 25.5時間、4年: 13.1時間）の影響が有意であった。1年次と4年次の差と滞在時間 ($t = -2.421, p < 0.05$)、2年次と4年次の差と滞在時間 ($t = -2.736, p < 0.01$)、3年次と4年次の差と滞在時間 ($t = -2.948, p < 0.01$)の交互作用が有意であった。全学年の女性と1年生から3年生までの男性は、大学滞在時間が長いほどに反応時間差が短くなる（とんぺー語が一般語への反応と同様に迅速である）傾向があるのに対し、4年生の男性のみは大学滞在時間が長いほど反応時間差が長い（とんぺー語への反応が一般語への反応ほど迅速ではない）傾向が見られた。

また、独立変数に「大学生活不安尺度」の下位尺度である「評価不安尺度」を加えた反応時間の

分析においても、1年次と4年次の間の評価不安 ($t = -2.974, p < 0.01$)、2年次と4年次の間の評価不安 ($t = -2.566, p < 0.05$)、3年次と4年次の間の評価不安 ($t = -2.315, p < 0.05$)の交互作用が有意であった。男性は評価不安の値が高いほど、反応時間差が大きくなる（とんぺー語への反応が一般語への反応ほど迅速ではない）のに対して、女性は評価不安の値が高いほど、反応時間差が小さくなる（とんぺー語が一般語への反応と同様に迅速である）という傾向が、学年が高くなるほど強くなることを示している。

4 考察

本研究では、キャンパスことばへの反応という指標から、大学生の大学への適応度の年次変化と性差を検討した。

LME分析の結果、年次変化に関して、1年生から3年生までは、学年が上がるごとにキャンパスことばの正答率が上がり、一般語との反応時間差も短くなっていくものの、4年生は3年生に比べて正答率が下がり、一般語との反応時間差も大きくなっていくことが示された。また、この傾向に大学滞在時間も影響していることが示唆された。4年生の平均大学滞在時間は、全学年の中で最も低い。滞在時間が短いために、大学でキャンパスことばを話す機会や聞く機会が減り、親密度が下がったために反応も鈍くなっていったと考えられる。本研究の語彙性判断課題を実施したのは11月から12月にかけてであったことに照らせば、4年生はすでに卒業を目前にして、大学よりも次の進路に目を向けていることの現れとも考えられる。

また、性別が語彙判断に影響を与えることも示された。男性は、1年生から3年生まで学年が上がるごとに反応時間差が短くなり、3年生から4年生にかけて反応時間差が長くなるという推移をとっている。それに対して女性は、1年生が最

も反応時間差が短く、4年生に向けて学年が上がるごとに反応時間差が長くなっている。このような性差が生じたのは男女間の言葉に対する姿勢の違いにあるのかもしれない。一般に女性のほうが言葉の変化に柔軟で、新しい言葉も積極的に取り入れる傾向は言語を問わず指摘されているが(米川、1996)、そうした女性の新規な語彙に対する姿勢が本研究にも表れたと考えられる。

さらに、「大学生活不安尺度」のうち「評価不安」がキャンパスことばの語彙判断の反応時間に有意な影響を与えることも確認された。この評価不安と語彙判断の関係に関しても男女で反対の傾向が見られた。上述したように、「評価不安尺度」は、大学でのテストや成績に関する不安を測定する尺度である。このテストや評価への不安が、大学にしっかりと向き合うかどうかという姿勢に影響し、その姿勢の違いが男女によって違うのではないかと考えられる。女性は大学での成績に対する不安を抱えているからこそ大学に行き、キャンパスことばをより頻繁に使ったり聞いたりする機会が多くあるために、親密度が高まり反応が速くなったのかもしれない。

キャンパスことばの定着と大学適応の関係は、社会情勢と密接に結びつき、「大学離れ」や「不登校」といった問題もはらんでいる。本研究で対象とした参加者は、順調に単位を取得し卒業の不安のない学生たちであったが、今後の課題としては、より深刻な状況に置かれている学生を対象としたさらなる検証が求められる。さらには、大学生のみならず、社会人、中学生、高校生などを対象とした同様の検討の結果とも比較される必要があるだろう。

このように、本研究は、キャンパスことばを対象とした語彙性判断の結果から、性差が大きく影響すること、また学年、大学滞在時間、大学における評価不安の大きさによってもキャンパスことばへの感受性が変化することを示した。このよ

うな本研究のキャンパス言葉の語彙性判断課題における個人差の知見は、語彙処理研究に新たな視点をもたらすための助けとなると期待する。

謝辞

本研究は、東北大学男女共同参画推進センター平成29年度スタートアップ研究費および研究スキルアップ経費(研究代表者:第二著者)による助成を受けて実施された。

引用文献

- 天野成昭・近藤公久(1999).『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性/単語親密度;第1巻』東京:三省堂.
- 岡田努(1995).「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」『教育心理学研究』43(4), 354-363.
- 藤井義久(1999).「大学生活不安尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』68(6), 441-448.
- 水野りか・松井孝雄(2015).「単語親密度の主観的評定値の問題:1.文字単語親密度」日本認知心理学会第13大会発表.
- 小野創・柳野祥子・小川萌子・大塚亜末(2017).「あなたの梅子度はどれくらい?親密度効果と大学生の属性推定への応用」日本認知科学会第34回大会発表.
- 薄井俊天・駒形舜・今野成真・藤井紀子(2018).「とんぺーチェッカー:語彙判断課題による大学生の属性推定」未公刊.
- 米川明彦(1996).『現代若者ことば考』東京:丸善ライブラリー.